

天皇制ファシズムと民衆
——長野県下伊那地方における
民俗思想史的考察

後 藤 総一郎

Fascism of the Emperor System and the
People

——A Study of Folklore and History of
Thought in Shimoina Region of Nagano
Prefecture

Soichiro Goto

目 次

- 序章 心性構造の歴史的俯瞰
- 第一節 仮説の提示
 - 一 民俗思想史の方法
 - 二 二つの思想の葛藤——その地方的範型
- 第二節 風土の多面的特質
 - 一 自然風土の特質
 - 二 宗教的風土の特質
 - 三 学問的風土の特質

第一節 仮説の提示

一 民俗思想史の方法

近代日本における政治思想的病理の総頭在化ともいわれた、いわゆる天皇制ファシズムの政治思想史的解析作業は、敗戦直後の丸山真男の諸論稿¹⁾をはじめとする、それにつぐ藤田省三²⁾らの作業によって、極めて透明度の高い生産性を示していったことは、すでにわたしたちの共通遺産となっている。

そしてそしらの研究の成果は、今日も決して色褪ることなく、ある不滅の位置を示していつているともいえる。

そしてさらに、それらにつぐ研究も、その成果の大小は別として、多くの作業が展開されていった。しかしその多くは、政治思想史の領域というよりは、むしろ、政治史もしくは歴史学（中世・近世・近代史を含む）のジャンルにおける研究が主流であったという印象が強い。

ところで、これらの成果については、のちに触れる予定であるが、さきに述べた丸山や藤田らの研究視角には、ひとつの、今日いうところのいわゆるパラダイム（paradigm）の型があったことはしばしば指摘されてきたことであった。

それはひとことでいえば、キリスト教の精神をベースとして生成されたヨーロッパの歴史とそれを分析したヨーロッパの理論を、ひとつの学問的フィルターとして、日本の近代史を解明しようと試みてきたということである。それゆえに、大変透明度の高い研究成果を示すことができたといえる。それは、ヨーロッパの歴史と理論が、一般に普遍的で合理的で意思的で可視的であることによるものであった。

だが、そうした透明な理論によっても、透視することの不可能な領域が存在したのであった。

それは、明治近代以降における、政治制度としての、丸山のいう「作為」によって形成された天皇信仰の意識もさることながら、それ以前の遠く古代中世から形成され継承されてきた、民俗学者柳田国男のいう「常民」のなかに抱かれつづけてきたいわゆる非制度としての天皇信仰の意識は、日本固有の民俗形象のために、西欧的神観念やそこからの理論的フィルターによっては、およそのぞき視ることは不可能であったといえる。

というのは、日本の民衆の精神史を形成した民俗のエトスとしての信仰世界は、自然信仰（アニミズム）と呪術信仰（シャーマニズム）の延長線上に形成された祖霊信仰と氏神信仰によってかたづけられており、しかもそれらは、西欧におけるキリスト教的信仰にみられるようないわば明文化されたバイブルをもつことなく、極めて不定形なそのうえ文字ではなく伝承によって形成継承されてきた民俗のエトスであるという、きわだった異相にその根本的なアポリアが存在しているという事情にもとづくものであった。

そのことの理解を欠くか、あるいはそこまで手をさしのべることを怠ったためにひきおこされた、“明晰さ”と“不充分さ”の所産ではなかったかと考えられる。

まして、「作為」としての天皇信仰の形成であったとしても、被支配者としての民衆のなかに抱かれてきた天皇信仰の観念は、古代とくに中世以降、祖霊や氏神の信仰の延長線上にセットされて生きつづけてきた民俗のエトスであったことを思うとき、この半ば悠久の不可視で不定形の持続継承されてきた天皇信仰のエトスの世界に、熱い精神史のスポットをあてることを怠ったことは、やはり「天皇制ファシズム」の政治思想史的解明作業にとって充分ではなかったといえよう。

そのことを深く察知し、丸山らの作業を補完し、より透明な分析作業を推し進めようとしていったのが、神島二郎と橋川文三の仕事であったといえる。

神島は、「天皇制ファシズムと庶民意識の問題」を収めた『近代日本の精神構造』（1961年）のなかで、次のようにそのモチーフを述べたのだった。

「丸山は、日本政治思想史の研究を通して現実の認識に焦点を指向し、西欧政治思想との比較において、鋭い問題意識とその解明のためのあらたな視座の提供とを試み、ことに『主体性』の問題を提起してきたことの意義は大きかった。それにもかかわらず、かれは社会的現実の底辺に迫りその分析的確さを保障する配慮がたらず、ややもすれば形態的把握の明快さにとどまりやすく、かならずしも歴史的現実には迫りえなかったうらみがある。」(傍点筆者)

そこから、「日本ファシズムは、すくなくとも日本人と社会との底流に奥深く根を下したものであり、その特質はこのような底流に鋭いメスを加えることなしには解明されえないのであり、そのような解明なしに未来を企図することも許されないであろう。」として「民族の意識の問題をトータルに取り上げようとした二人の先人」の一人として柳田国男の創成した日本民俗学の成果をすいあげ、自らのモチーフを、すなわち丸山が欠いた「民族の意識」の「底流」に照明をあて、「天皇制ファシズム」の心性構造をより一歩透明なものとしていったのである。

いわゆる「丸山学」と「柳田学」の「架橋」の学がそれである。

そしていま一人、橋川文三も、天皇制国家の形成を「内在的に解明」する方法として、「民俗学思想そのものの政治思想史的意味づけという予備的段階に止らざるをえなかった」(『近代日本政治思想の諸相』, 1968年)としながらも、明治末期における、明治国家の完成に向けての、「地方改良運動」と呼ばれた一連の「地方」と「民衆」の「行政的規制」の実態を、柳田国男の民俗学の成果を導入しながら明らかにする作業に成功を収めていった「明治政治思想史の一断面」(前掲書所収)⁸⁾の論稿は、見事な証左といえよう。

あるいはまた、今日プロブレマティッシュな問題となりつつけている「靖国神社」の問題について、「靖国思想の成立と変容」(『時代と予見』所収⁹⁾, 1975年)を通して深い洞察を試みることができたのも、民俗学の成果を汲みあげての思想史的作業であったからだといえよう。

これらの成果は、丸山真男や藤田省三らの方法を一歩前進させ、より構造的に近代日本の政治思想を解明する道を切り拓くこととなった。それはそのまま、言葉をかえれば、「一種の反政治的思想体系」であり、「政治思想史の対象となりえないであろう」(橋川)とされた「民俗学」の資料が、政治を支える被治者としての民衆の心意世界を理解するためには、必要不可欠の材料として取扱わなければならないことを予知することになっていっ

た。それはさらにいえば、民俗学的資料の、日本政治思想史における、「市民権」の獲得を意味していったともいえる。

その研究史をふまえながら、いま一歩、その成果を前進させたいと希望し、いいかえれば、丸山らのそして神島らの研究にみられたいわゆる文献研究によるマクロな視点から、ある地域における実証的研究というミクロな方法を通して、近代日本の暗部とされた「天皇制ファシズムと民衆」をめぐる心性構造の歴史的考察を推めながら、そこによりリアリティーのある果実を獲得したいと展開してきた、ほぼ10年にわたるささやかな成果の概観が、ここでの序章における小稿である。

その研究対象として、長野県下伊那地方に実証研究の三脚を据えつづけ、民俗思想史の方法を通して、ひとつの特殊からある普遍的な果実を獲得できると予測し、ほぼその成果を収めうることができたのには、第二節に示される風土の個性に裏づけられたことと、なによりもわたしの精神形成を育んだ原風土であったということとをそこでの歴史の感覚的知悉度のゆえであったということをつけ加えておかねばなるまい。

とはいえ、日本政治思想史研究に、民俗思想史の方法を導入して、しかも地域史研究という実証的研究を通して、主題とした天皇制ファシズムと民衆の心性構造の深層にどこまで通底できたかは、いまは定かではない。

ただ、いまいえることは、この仮説的方法が、決して不可能ではなかったことと、むしろこの方法を通してでないと、この主題の心意世界はほとんど透明な歴史像を浮かび上がらせてくれないという確信だけはわたしに教えてくれたように思われてならないのである。

二 二つの思想の葛藤——その地方的範型

さて、主題に迫るための第二の仮説として、かつて丸山真男が指摘したことがあった次のような公理が、実は国家レヴェルだけではなく、地域社会における歴史的展開においても、そのことがいいうるのではないかという問題について検討しておきたいということである。

丸山は、「明治時代の全体を貫ぬく国家思想の性格というものを考察」して、次のように「明治国家の思想」¹⁰⁾をきわだてて述べたことがあった。

「明治維新の精神的な立地点として、これは極く常識的な回答であります、われわれは二つのものを考えることが出来る。一つは、御承知のように尊王攘夷論であり、一つは、公議と論思潮であります。この尊攘論と公議と論思潮というものが、明治維新の精神的な背景になっていた(略)。つまり尊攘論の発展としての国権論と、それから公議と論の発展としての民権論、この二つが恰

もソナタのテーマのように絡み合いながら発展して行くというのが、大体思想的に見た明治国家の発展態様であるというふうにいえるのであります。」

丸山は、これを、ペリー来航を契機とする、対外的危機における政治団体の反射的な「自己保存本能」の現われとしての、権力の政治的集中と拡大の政治学公理であると説明したのだった。

たしかに明治国家はもちろんのこと、その後の政治史もおよその「対立的統一」の展開として生成されていたということができよう。

ところが、それは、たんに中央のつまり国家レベルだけにいうことではなくて実は地方においてもほぼパラレルな史的展開をなしとげていった足跡を、ここ下伊那地方においてもみることができるのである。

たとえば、そのおおよその歴史像をスケッチすると、次のようなラフ・デッサンが刻まれるのである。

まず、民権思想と運動の展開について、その系譜をたどってみよう。

一般に、長野県とくに下伊那地方は、明治近代以降、いわゆる「革新」の地と呼ばれてきたが、そのさきがけは、1884年（明治17年）におこされた「飯田事件」と呼ばれた、この年各地で相次いで展開された自由民権運動のいわば終焉を意味した「事件」に示された。

1882年に創刊された『深山自由新聞』は、わずか1年余り、107号という短かい生命ではあったが、自由民権思想を広くこの地に伝える大きな意味を果していった。やがてそれをベースとして、松方デフレ下にあえぐ農民の窮状を救済すべく、生活相談と学習を目的とした「愛国正理社」を、1883年（明治16年）に誕生させていった。その会員数、2,500という大規模なものであった。だが、三河民権志士によるこの地における「拳兵」構想とその発覚によって、その指導者が未然に逮捕され、未発の「事件」（1884年）とされていったのである。

次いで歴史は一めぐりして、明治末期から大きなうねりを示していった青年運動のなかから、この地における大正デモクラシーの思想と運動を誕生させていったのである。

1921年の「郡青」の自主青年団の獲得。同年創刊された歌誌『夕樺』に示された「歌」から「政治」への精神形成。その象徴的な人物・羽生三七を中心とする「下伊那文化会」および「下伊那自由青年連盟」（1922年）の結成。彼らを中核とした1923・4年の「普選」大デモストレーション。1924年から29年にかけての、青年たちの学習機関「伊那自由大学」の開講。これらの広汎な青年運動を背景として、1926年、政治結社・労働者農民党南信支部を結成し、1928年の普選第1回総選挙に作家の藤

森成吉を立てて戦ったが、政府党の激しい干渉にあって惜敗した。のちに、1935年、改組した社会大衆党から県会議員に立候補した羽生三七が、その雪辱をかるうじて果した。しかし、1938年、社会大衆党そのものが、「国民の党及び国民の組織」への変貌をとげるなかで、いわゆる上からのファシズムの波のなかにまきこまれてしまったことは、当時の日本の歴史に示されていった通りである。

こうした民衆の権利を拡大しようとする、この地方における明治・大正・昭和にわたる、文化と政治の熱い運動のうねりの歴史をみると、国家レベルで展開された史的展開の、鋭く直接的な反応の地方史の典型をそこにみることができるといえる。

一体、その理由はなんだろうか。近代国家が、中央集権的な統一国家として展開されたがための、地方のパラレルな反応の歴史を生み出していったということなのか。たしかにそうした理由のための、同様な地方的歴史事例を、わたしたちはいくつか数えあげることができよう。しかし、民権思想の延長線上での、いわゆる反対制の思想運動の展開であったということでは、やはり強靱な地方的運動であり歴史であったとはいえよう。とすれば、そのより深い個性的理由とは、この地の歴史的風土なり、ある精神的伝統に由来するのではないかということとなろう。

そのひとつの理由が、明治国家以降に貫流したいまひとつの主流をなした国権思想の展開であった。そしてその地方的展開が、この地においては、中央のストレートなそれではなく、むしろ積極的な、あるときには異色な国家思想の先兵として躍り出る歴史をも刻んでいったのである。

その歴史的展開をみてみよう。

まず国権思想の萌芽は、正確には勤王思想の形成は、幕末における平田篤胤の学問を受容する国学運動の全国的メッカの地としての展開のなかに孕まれていった。

弘化元年から明治9年までの門人を記帳した「平田没後門人帳」⁹⁾による全国総数3,733人中、信濃の門人556人、うち伊那296人という数字は、突出した数値を示していた。

正当な学問のいまだ不在な時代と地方において、この学問を担った主役は、農民層と町人層であった。そしてそこで学んだ彼らの学問とは、ひとことでいえば、平田学の学問的タームであった、産土神の祖霊と天皇の祖霊との連続性を説いた、そこからの農民の歴史的存在と正当性の自己認識は、武士を中心とする幕藩体制の忠誠原理への精神的空洞化を育んでいくこととなった。その精神が、直接、倒幕の思想へと向かうこととはならなかつ

たとしても、維新期における武士団の勤王思想を支える地方的底流とはなっていたのである⁷⁾。

自らの歴史的現在的存在性と正当性を認識するという、平田学からの学びの運動は、やがてさまざまな民政改革や生活改革へとダイナミックに展開されていった。

そしてこの思想と運動は、維新後、一方に勤王思想の晴れ晴れとした展開の原点をなし、また一方に、学びからえた、つねに体制を相対化し、自己をすなわち民衆の存在のアイデンティティーの獲得を目指すという、二極分解の構造をましてゆくこととなっていたのである。

たとえば、国学運動の推進役を果たしたメンバー（とくにその家系）たちの、1890年に発布された、忠君愛国の倫理形成を目指した「教育勅語」の「普及徹底」を図るための教化団体としての「実行会」を組織し、その全国化を推めようとしていった動きは、その典型的な証左といえよう。さらにその脈流は、1923年に渙発された「国民精神作興に関する詔書」を受けて、その実体化のために、いち早く「下伊那郡国民精神作興会」（1924年）を発足させ、その組織化と啓蒙のための機関誌『作興』の発行を積極的に展開していったなかにもうかがうことができよう。そのイデオログ森本州平が書き遺していた未発表稿『伊那思想史稿』⁸⁾（1938年）は、その間の歴史の進展の内実を伝えてくれるものとなっている。

この「作興会」と在郷軍人会とが連携しながら、さきに述べた青年たちの「左傾思想排除」の役割を果たしていたのである。と同時に、この地の町村会その他の公的組織と人物をも掌握し、天皇制ファシズムへの地方的支配をも担っていたのである。

さらに政治的には、1931年に「愛国勤労党南信支部」を結成し、1932年には「信州郷軍同志会下伊那支部」を誕生させて、県会、衆議院に、その中心的人物を当選させ、下伊那の政治と思想を一人占めし、一色に塗りつぶしていったのである。

こうした勤王思想のたからかな進軍のまに、民権思想の延長線上に花開いた社会主義思想はあとかたもなく押しつぶされていったのである。

二つの思想の対立と統一の歴史は、こうして中央においても地方においても、政治的主権者と宗教的絶対者として君臨することを制度化した近代国家のなかでは、勤王・国権思想に軍配があがっていったことは思えば当然の帰結であったとはいえよう。

しかしそれにしても、山深い一地方において、かくも激しく二つの対立する思想が、次々と時代の節目にたちあらわれては、葛藤し、そして勤王思想にのみこまれていった歴史を展開していった地方というのはやはり稀有といえよう。

ではあるが、そこに色濃く展開された、国家レヴェルの一種ミニチュアともいえる歴史の刻みのなかに、「作為」ではなく、その国家の「作為」を可能ならしめた「自然形」としての、とくに勤王思想の脈流をみることでできるといえよう。その思想的脈流を確かなものとしてのぞきみるためには、いまひとつ、近代以前の、さまざまな風土的心性構造について概観しておかなくてはならないことを迫られるといえる。

それゆえに、次に、その多面的な角度から、この地方の風土的歴史的特質についてスケッチしておくこととする。

第二節 風土の多面的特質

一 自然風土の特質

信州は、日本の屋根と呼ばれる。北アルプス、南アルプス、中央アルプスに囲まれた地が長野県であるからだ。その南すなわち赤石山脈と中央すなわち木曾山脈の連なる高峰にはさまれた谷の山里が伊那地方である。

その自然風土が生みだした特質のひとつが天竜川であり、照葉樹林帯の北限であることとつながった縄文作物地帯であり、さらにメディアン・ラインすなわち中央構造線の走る地帯としての特質を有しているところである。

まず天竜川は、農耕作物や魚族の恵みを与えてくれ、同時に信仰における下流からは寄神信仰を、上流からは穢を流す信仰の通路としての役割を果たし、そしてまた「あばれ天竜」と呼ばれてきたように、幾多の水害をひきおこしてもきたのであった。

縄文作物を主食として移入し定着してきた先住民にとっては、山岳斜面の照葉樹林地帯に属するこの地は、豊かな生活の場を自然として提供したのであった。

そしてフォッサ・マグマの貫流するこの地帯は、鉾や塩水を噴出させ、そのことがたとえば中世の南北朝争乱時に、南朝の第五皇子であった宗良親王を、山深い下伊那大鹿村の山里に、30年も隠棲させることができたのであった。と同時に、そのことを契機として、尊王思想ののちのちまで脈流させ伝統化させることとなっていたのである。

自然風土が育んだ有史以前からのながい古層の文化が、その後のこの谷の歴史の大きな公分母になっていたことを見逃すことはできないといえよう。

二 宗教的風土の特質

この地方には、かつて古代に創生された、東国を中心とした全国的広がりをもって信仰された諏訪神社をまつる、諏訪信仰があるということである。

諏訪信仰は、内県、外県、大県、小県の神領によって

支られていたが、伊那谷はその外県に属して、早くから信仰共同体としてその精神のよりどころとしてきたのであった。

やがて中世の鎌倉期には、源頼朝が守護神としたこともあって、八幡信仰が、これに重って信仰されていった。このなかで、松尾村にある八幡神社は、1900年（明治33年）県社に昇格されるほどの規模の大きな神社であることから、その信仰のあつさを知ることができよう。

もともと八幡信仰は、先祖の御霊を鎮める神として4世紀末に朝鮮から渡ってきた信仰であったが、天平15年（743年）、聖武天皇の大仏建立の詔を受けて、その予言による成功を納めた八幡神は、朝廷から伊勢神宮に次ぐ、全国第2の総廟としての位置を認められ、その崇敬をたかめていった信仰である。

そこには、その土地の祖霊を鎮めるとともに、天皇の祖霊をも鎮めまつという二つの信仰をあわせもっていたことと、いまひとつは生者の病いをも癒す呪術、託占の術をもった神として存在したからであった。

ここに、祖霊信仰と天皇信仰とがセットされてまつられてき原像をみる思いがする。そのことと思想史的検証

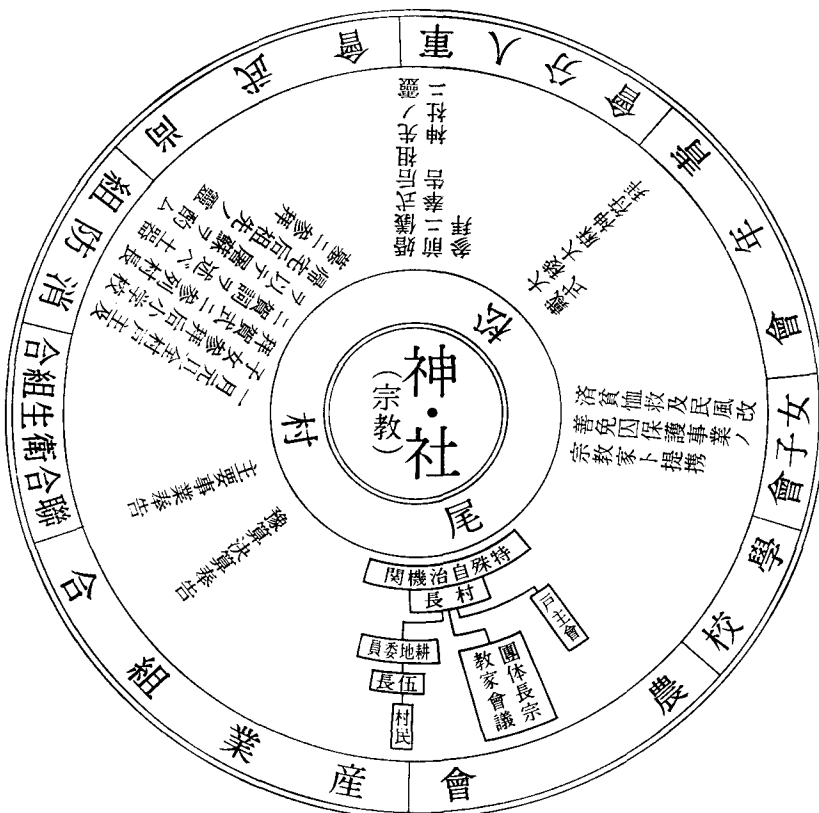
作業は改めて果されねばならないが、天皇制ファシズム期に、この地の八幡神社をまつる松尾村で、神社信仰と行政とをセットしたいいわゆる「祭政一致」の政策が、村長命で展開されていたことのなかに、「自然形」としての「下からのファシズム」の胎盤を用意していった歴史像の例証としてみるができないだろうか、という印象もあって、その実態の一端を紹介しておくこととする。

まず1924年に作成され、全村戸に石版刷で配布された、「長野県下伊那郡松尾村治ト神社並ニ各種団体系統的活動連絡図」を掲げておこう（図表参照）。

この図表からもわかるように、神社を中心として、行政から学校教育さらに家庭にいたるまで、すべて信仰体系化されていたことが理解されよう。

そして1928年には、図表に示されたような実践項目12をあげて、「松尾村治ニ対シ思想上における根本方針」の実践に努めたのである。『松尾村誌』（1982年）は、次のように述べている。

「松尾村は旧幕時代以来八幡宮、諏訪社の祭祀を怠らず、教神の情は村民に浸透し、村治当事者も祭祀即政治と観じ、敬神は良政善治の根本としていた。敬神の念篤



く、祭政一致を己が村治の理念として来た村長森本勝太郎は、昭和3年9月『松尾村治に對し思想上における根本方針』を示し、村吏員・教育・産業その他各種団体もこれを容れて実践に努めた。」

さらに1936年、天照皇太神、県社八幡社、村社諏訪社を正面に奉祀した講堂を建設し、神社を中心とする村民の融合団結、祭政一致の練成の場としたのであった。

こうした、当時における「模範村」としての実績が認められて、1938年、自治制発布50周年記念に、「優良町村」として、内務大臣から表彰を受けたのであった。

この「祭政一致」のイデオログ森本勝太郎の養子が、さきに述べた「作興会」のイデオログ森本州平である。親子して、この地方の天皇制ファシズムのイデオログの役割を果たしたのだ。と同時に、この松尾村こそ、この地方の範型をも示していったのである。

ところでこの地方にはいまひとつの信仰が、村人の心の世界をとらえてもいたのである。それは山岳信仰のひとつである富士信仰である。

中世末の戦国乱世に発生した「富士講」は、やがてこの地方にも移入され、富士の霊力と天皇への忠孝がセットされて「不二教」を生み出し、幕末にはこの地方で信者数345を数える広がりを見せ、さらに幕末の国学と溶けあって新たに「実行教」を誕生させていった。これらの系譜が、明治以降の「実行会」「作興会」へとつながっていったのである。

ちなみに、富士信仰と天皇信仰とが結び、信仰団体から教化団体へと転位していった。その連結の思想のもっとも鮮かな姿を、さきの「実行教」の「教義」のなかにみえてくる。

1. 惟神の大道を宣揚すること
2. 富士山は地球の脳髓又其精神なりと信ずること
3. 富士山を天祖参神分霊の分在所となすこと
4. 賢所を遙拝し、皇統一系国体の無窮を祈ること
5. 上下親睦家業を励むこと

ここには、自然信仰と人神信仰とが溶けあって、民衆の生活と政治をささえる規範が徐々にしかもなんの抵抗もなくまさに自然形として形成されていった歴史の跡をみることができるといえる。地域や生活に根をおろした、民衆のなかにおける不可視の天皇信仰の歴史像がここにはある。

それとは別に、中世芸能の宝庫ともいわれるこの地には、霜月歌楽やさらに奉納歌舞伎や人形芝居などが豊かに伝承されており、それら芸能を通して培われてきたひとつの倫理観が、幕末にあるいは民権期に、さらに大正デモクラシー期に、素朴な民衆青年の「正義」と「抵抗」の感性を育み、爆発させていった要素となっていたこ

とも改めて検証されねばならない対象として残されている。

いずれにしても、遠くながく培われてきた、この地の固有な宗教的風土とその信仰精神のなかにみられた天皇信仰の不可視の歴史像が、昭和ファシズム期に、下から無言でささえていった精神形象となっていたことだけは事実といえよう。

「天皇制ファシズム」の「論理と心理」の深層を明晰にするためには、従来の政治思想史の方法と民俗史の方法との実証的架橋作業が推められなくてはならないことが、以上のことから明瞭とならざるをえないことだけはたしかといえよう。

三 学問的風土の特質

次に改めてこの地方の特質として述べておかななくてはならないテーマは、一般に教育県といわれる信州の、その典型ともいえるこの地方の背景について、やや印象風に記しておくこととする。

それはひとことでいえば、すべて行動のまえに思想がある、という精神的風土というか気質についてであるが、それがどこからどのように形成されたかは定かではないが、まさに印象風にいえば、それは、ある種のこの地方の普遍神ともされた諏訪信仰の信仰共同体のなかから育まれていったのではないかというのがわたしの予見である。

つまり、古代から一筋に諏訪信仰を中心として信仰し、そのなかで培われた揺がぬ倫理観や信仰観を通して、すべてのものを問い判断していったという精神形象とその伝承が、生活や実践の前途をつねに規制しあるいは規範となっていたのではないかということである。

そしていまひとつは、中世末に、歌人でもあった宗良親王が遣していった歌道への尊崇が、近世に武士を中心として歌道をさらに国学をさかんにしていったのではないかという系譜をみることができよう。

とくに、幕末国学の隆盛はその典型的な例証といえよう。信仰から学問へ、そのなかでつねに自己のアイデンティティを獲得しながら生きていく、という人生の道をこの地の人びとは受けついでいったように思われてならないのである。

自由民権期における民衆の組織的学習への渴望、大正デモクラシー期の共同学習の主体的展開なども、その熱い証左といえよう。

信仰から歌へ、歌から学問へという精神的風土ゆえに花開いた、二つの思想の激しい対立の歴史の展開であったともいえる。だからこそ、つねにそのときどきに應じて、強く明瞭な世界観と人生観を己れのなかに宿したい

と希望してきたのではなかったろうか。

その意味では、歴史の価値判断は別としても、極めて人間的歴史を刻んできた一地方と民衆であったとはいえよう。

以上、主題に向けて、今後展開しようと予定している数章にわたる論稿のラフ・スケッチを記して、ひとまず筆を擱くこととする。

註

- 1) 丸山真男「超国家主義の論理と心理」『世界』1946年5月号、『現代政治の思想と行動』所収、1964年、未来社。
- 2) 藤田省三『天皇制国家の支配原理』、1966年、未来社。
- 3) 『橋川文三著作集』3に所収される。1985年、筑摩書房。
- 4) 前掲書、2に所収、1985年、筑摩書房。
- 5) 「明治国家の思想」、歴史学研究会編『日本社会の史的究明』所収、1949年、岩波書店。
- 6) 芳賀 登『幕末国学の展開』、1963年、塙書房。
- 7) 拙著『常民の思想』、1974年、風媒社。
- 8) 1938年、ジャーナリストである塩沢栄三に全体の構想と資料を提供して、600枚の原稿を完成させたが、公刊されないまま今日にいたっているものである。この9月頃に、わたしの解説を附して、公刊される予定である。なお、森本州平が記した60余冊の「日記」の検証作業が、須崎慎一によって推められている。([史料紹介—森本州平日記(抄)]『神戸大学教養部紀要』35号、36号、37号)